Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

033

乳幼児保育内容論の創造（その6）

（2）全国的な保育実践におけるY園の保育実践の位置づけ

○植村　としえ（たんぽぽ保育園）　　小出　まみ（名寄女子短期大学）

Ⅰ　本研究の目的と方法

①　目的

我々はあるべき保育内容論の創造にむけて、'70年代のY園の保育実践を考察し，この当時行なわれていた全国の保育実践と比較・検討してみようと考えた。その方法として本研究その1～5までで見てきた，S児やD児らが受けてきた保育実践だけでなく，当時のY園全体の保育実践を検討し，その特徴や問題点を明らかにしたい。それらを全国の保育実践と比較・検討することにより，全国的な視点からY園の保育実践の位置づけが可能となる。ここではY園が認可園となった'73年から'80年までの保育実践を対象とする。

②　方法

Y園では'75年と'79年に2冊の保育実践記録集を発行している。この中に紹介されている保育実践をすべて検討し，'70年代のY園の保育実践の特徴をみた。ここに紹介されている保育実践は，Y園全体で確認されたものであり当時のY園全体の保育実践のレベルであると判断した。

Ⅱ　'70年代のY園の保育実践の特徴

①　Y園の歴史

Y園は，'68年7月無認可の共同保育所として出発し，'73年10月乳幼児併設園であるY園となった。

'73年から'80年までのY園を保育実践上で位置づけると次のようになる。

- ○'73～'75年　第一次高揚期
  - ・グループ別学習会の実施
  - ・各年齢の資料づくり（カリキュラム化に至らず）
- ○'76～'79年　転業病期
  - ・けい廃症候群などの大量発生
- ○'80年　　保育元年
  - ・月別カリキュラムの形式の改訂
  - ・年度末にその年の保育実践の総括のための合宿の実施

②　Y園の保育実践の特徴

全保育者で書かれた2冊の前記の記録集を読み，その中の保育実践を分析した結果，その特徴は次のように考えられる。

- ○「子ども像」に立脚した保育実践
- ○家庭と園，地域と共に創りあげる保育実践
- ○園独自で栄養士を採用し，食生活を重視した保育実践
- ○障害児保育　など

また，保育者の専門性を高めるため，園外研修，園内研修など保育者間の討論の場を保障する努力がされていた。

③　Y園の「子ども像」と保育実践

Y園では，子ども達を「未来の主権者」にと願って，共同保育所時代から園独自の「子ども像」を設定していた。「身体の丈夫な子」など，5項目の「子ども像」は，'75年「年齢別保育目標」に展開され，日々の保育実践に具体化されていった。

「子ども像」に立脚したY園の保育実践は，○体のしなやかな子，○手のしなやかな子，○心のしなやかな子の3点に重点をおいた保育実践であったと後にY園の園長はまとめている。

Ⅲ　Y園の保育実践と全国の保育実践の比較・検討

Y園では「集団づくり」「労働的活動」「日課の確立」「手で創り出す活動」などの保育実践が多様に展開されていた。その中でも特に多くの実践記録がみられた「集団づくり」「体力づくり」「手で創り出す活動」の3点について，全国の保育実践と比較・検討する。

①　集団づくり

Y園では「自治的な生活活動」の一環として，「集団づくりを位置づけている。各年齢を通して，全保育者の保育実践の土台として大きな位置づけがされていた。

乳児期の仲間関係を育てるために，目ざめている時間の活動がいきいきとできるような日課の設定の仕方や，少人数のグループの生活をすすめるためのグループ担当制を採用していた。2歳では「お手伝い活動」や「外あそび」をしていく中で集団づくりをしていった。3歳以上児では友達同志の話し合いを大切にしており，そのような力をもとに「当番活動」や「係活動」，「リーダー制」の導入へと発展していった。

全体としてみると，子ども達の要求を大切にし活気に満ちた集団づくりが展開されている。記録集には3歳以上の「集団づくりのまとめ」があり，その中では当番活動など労働的な活動がまとめられているが，「あそび」での集団づくりについての記録はみられなか

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

った。このことは「あそびの指導」の取り組みの弱さをあらわしていると思われる。一方，全国的にみてもあそびのおもしろさや，あそびによる集団づくりの実践記録がこの時期少なかった。

集団づくりの方法をめぐっては，当時全国的にも様々な新しい試みが提案され，活発な議論も行なわれていた。たとえば，低年齢においては「2人組」からの集団づくりを考え実践を試みた例などである。Y園においても集団づくりの手だてや方法については，もっと保育者間で検討していく余地があった。

② 体力づくり

Y園では「健康な体づくり」をめざして，0歳から「体力づくり」の実践が押し進められている。たとえば，ハイハイから歩行の移行期に足腰をきたえるという目的を持ち，ハイハイで「階段登り」を行っている。歩行が完成した1歳の「散歩」にはじまり，隣接する大学の構内を利用し，各年齢を通して歩く，走る，跳ぶなどの多様な保育実践が展開されていった。その中でも「散歩」と「マラソン」を中心とした保育実践が行なわれていた。

全国的には，土ふまずが形成されていない，体がかたく動かそうとしない，敏捷性が欠けているといった子どもの体のおかしさについて，問題にされ始めていた時期であった。このような背景のもとで，「たんれん」を中心とした「ハダシ保育」「ハダカ保育」「マラソン」などの保育実践が，全国各地でも行なわれていた。このような保育実践が広くみられるなかで，正木健雄らによって「たんれん」中心の体力づくりの保育実践の見直しと，その科学化・系統化が提唱された。それは保育現場の実践に影響を与え，現場からの努力もみられた。

Y園においてはマラソンなどの保育実践のように，「たんれん」中心の保育実践が行なわれていた。Y園の体力づくりの実践の再検討にあたり，科学化・系統化が今後の課題となろう。

③ 手で創り出す活動

Y園では手を使って物を創り出す活動を大切にしてきた。0歳においては保育者らが作った手づくりのおもちゃ等で，手を使う遊びを多くとり入れてきた。これは後に食事や衣服の着脱ができるようになる「基本的生活習慣の自立に向けて」の実践のように発展させてきた。3歳では「バケツづくり」のように自分達で作ったおもちゃを生活に生かす実践，4歳では「食べ物づくり」5歳では「運動会に使うハシゴづくり」の実践のように子ども達自身が目的をもち，長い見通しが必要な保育実践が取り入れられている。

全国的にも手が不器用で物を創り出せないなどの傾向が出現していた。しかしこの当時は，創り出す手の活動を重視した保育実践報告はあまり出されていなかった。このような全国的状況において，Y園が早期に手の活動を重要視し，保育実践を展開していったことは特筆に値する。

しかし乳児期においては，手の操作能力の獲得が「基本的生活習慣」の自立に結びつけられるあまり，あそびを豊かにするための手の発達の重要性が第二義的なものになっていた。

④ 全体を通して

このようにY園の保育実践を全国の保育実践と比較・検討してみた。Y園は共同保育所から認可園となり，保育者達は新しい保育理論を学びとる姿勢が強く，多くの分野で全国的な保育実践に照らし合わせても先進的な保育実践が展開されていた。

しかし一方では，転業者の発生などで新しい発達理論の学びとりが遅れていた。そのため保育者達に各年齢の発達の特徴や発達課題の認識が乏しかった。各年齢の特質に見合った保育実践の意図的な展開が不充分であった。たとえば1歳におけるあそびの指導のねらいの設定の弱さ（みたて，つもり行動が位置づいていない）また，同じ1歳の立く事の多い子に対する画一的な対処（発達の危機的状況としてのとらえがされていない）などである。1歳で「順番」「ルール」の導入がなされるなど，保育実践が「早く，早く」となってしまう傾向があった。

またあそびの位置づけの弱さも指摘できる。記録集の中にはあそびについての記録はほとんど見られなかった。日々の保育実践では豊かにあそびが展開されているが，意図的な指導がされていなかったからである。

リーダーとしての主任制の位置づけが弱く全体の保育実践の質を飛躍的に高めるまでに至らず，学んだことが全保育者の共通認識にならない保育実践が多々あった。

近年は各年度末の保育のまとめなども蓄積されてきており，'80年以降の保育実践の充実を期待できよう。

Ⅳ まとめと今後の課題

以上，'70年代の全国の実践の，質量両面の充実を具体的に確認し，その中においてY園の実践の先進的な側面と，発達の道すじのとらえ方やあそびの意図的な指導の弱さなどを確認できた。

今後は引きつづき次のような課題に取りくみたい。

- '70年代の諸実践をめぐる論争・理論の整理
- 保育内容の系統化・カリキュラム化の諸試案（つ順次）

NII-Electronic Library Service